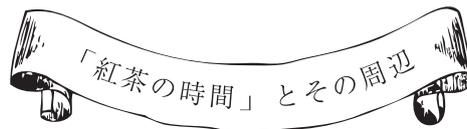


きもちは、 言葉を さがしている



第14話

水野 スウ

満30歳の「紅茶の時間」

このマガジン原稿を書いている2013年11月、「紅茶の時間」はちょうど30歳になりました。それに関しての特別なことは何もしないつもり、と前号に書いた通り、大きな行事的なことは何もせず、あいも変わらず週一回わが家をあけて、そこにやってくる人たちとの静かな、時たまにぎやかな時間を、共有し続けています。

それでもやっぱり、おもしろくて不思議なドラマがその折々の時間内に生まれてきて、私は毎回、その第一目撃者になれる。というわけで前号に引き続き今回も、毎週のふつう紅茶の、記憶アルバムからの何コマかをご紹介します。

お正月の紅茶

毎年、新年はじまってすぐの紅茶の時間は、紅茶が一杯もでてこない、「お薄の時間」へと変身します。

同じ町に住むEさんから、「スウさん、一つお

願いがあるんです。私、お抹茶が大好きで、家でも毎日のんでるんだけど、私の点てるお薄を紅茶のみなさんにも飲んでもらいたいので、年に一度でいいから、紅茶のお台所を私に貸してくれませんか」という申し出があったのは、今から18年前のこと。

翌年のお正月、紅茶に来た人みんなにYさんがお薄をふるまってくれて、それ以来、一度も欠かすことなく、新年の紅茶の時間が、お薄の時間になっているのです。お作法もとくになし、お代わり何杯でも、の実に気楽なお茶会です。

Eさんはフルタイムで働いているので、ふだんの紅茶に来れることはめったにありません。その日は前もってお休みをとり、お抹茶からお菓子から、お茶道具一式を用意してやって来て、午後いっぱい、わが家の台所でお薄を点ててくれます。時には人の出入りが多くて、紅茶の開店時間の5時間中、Eさん、台所にずっと立ちっぱなし、という年もありました。

私の紅茶における役割はだいたい3つあって、①紅茶のお変わり入れ係、②話を聴いてもらいたい人の、話を聴く係（紅茶がこみあっていて忙しい時をのぞく）、③ひとのいいところを見つけたら、それを言葉にしてその人に伝える係、だと思っているのだけど、この日は①の役割から完全にはずれさせてもらえるので、いつもならお客さんが見えるたび、新しい紅茶をいれにちょこちょこ席をたつところ、薪ストーブのまえにこっぴりと座ったまま、一年で一番、楽させてもらえる、私にとってはお正月休みのごほうびのような時間。その上、私の姉の遺したお抹茶碗も、この日は大活躍できる、といううれしいおまけつき。

お薄の時間が始まって何年目だったか、せめてお抹茶代だけでもお支払いした方がいいんじゃないか、と申し出たことがあったけど、即、彼女からこんな言葉が返ってきました。

「とんでもない。この日は年に一度の、とつてもしあわせなきもちを味わえる、私の特別に大切な日なんです。私にとっての日常茶飯事を、みなさんがこんなによろこんでくれる、しかも私一人に、これだけいっぱいありがとうを言ってもらえる日って、ふだんはないです。お金をいただくよりも、こっちのほうがずっとうれしいお礼です。なので、どうかこれからも続けさせてください、私がうれしくてうれしくて、勝手にしてる、紅茶のお台所占拠なんですから」

そう言われればたしかに、お薄の日は、彼女にむかって、ありがとうのシャワーの一年分が、新年の紅茶に来る誰かれから降り注ぐ日でもあるのでした。

そうかあ、一杯のお茶が、差し出された人のきもちをあたためると同時に、差し出す側のきもちをも、しあわせにあたためる。そんな行ったり来たりがそこにあるから、おたがいにきもちよく、長続きしているのだなあ。そして、そういう場を提供している、紅茶なのだなあ。

今はもう11月。そろそろEさんが仕事帰りの遅い夕方にならりと紅茶によって、スウさん、来年のお薄の時間はこの日でもいいでしょうか、と訊

いてくることです。

15年ぶりの紅茶

今はつくば市に住んでいるIちゃんから、ある日突然の電話。「もしもしスウさん、今度の水曜日って紅茶あいてる？私と、妹とその赤ちゃんと、つくばの友だちと、3人で紅茶に行こうと思ってるんだけど」

もちろんどうぞどうぞ。紅茶は元旦と大晦日以外の水曜なら、よほどのことがないかぎり、あいています。それを知ってる人は確かめることもせず、いきなり来たりします。でもIちゃんはさすがに15年ぶりくらいなので、いちおう確認せずにはいられなかったのでしょう。

Iちゃんとはじめて逢った時、彼女は高校2年か3年だったか。この連載の第10話に登場した、不登校経験のあるTくんが実行委員長になって開催したシンポジウム「学校って何？」—学校に行っている子と行かなかった経験を持つ10代の男女7人が、自分にとって学校って一体何だろう、と語りあったユニークなシンポジウムで、Iちゃんもその時のパネラーの一人でした。

その実行委員会のミーティング場所が私の家だったので、学校に行っているIちゃんたちの下校時間を待って、若い子たちがわが家に集まり、かんかんがくがく話しあってものごとを決めて行くのを、うしろから眺めている、というのが当時の私の立ち位置だったように記憶しています。

高校卒業後Iちゃんは、つくばにある大学に行き、介助の仕事につき、珈琲の焙煎を仕事にしているパートナーと出逢って結婚、現在に至る、というくらいしか、私は彼女のことを知りません。

一方、彼女は私の出しているのみら通信の、ずっと購読者なので、私サイドの情報はおおまかにつかんでいて、新しい本が出たと知れば何気にメールで本を注文してくれたりします。今年の春のクッキングハウスへのお話の出前では、Iちゃんがつくばから参加していて、久しぶりに再会しました。

妹さんは京都から、生後2ヶ月の赤ちゃんを連れての帰省、とのこと。それぞれ遠くに住んでいる姉妹が、そろっていつか石川にいるのは何でだろう、と思ったら、もともとは、100歳近いおばあちゃんのお誕生日をお祝いするためにみんなで集まろう、という計画だったもよう。けれどもおばあちゃんのお具合が今ちょっとよくないので、予定を早めて、ひい孫の顔も見せに、かつての家族が全員、金沢の家に来ることになった、そのタイミングのおつりで、紅茶にまで足を伸ばしてくれたのだとわかりました。

Iちゃんのつくばの友だち、静かなたたずまいのKさんは、彼女から私の本を借りて読んで、どうしてもこの目で一度、紅茶の時間を見てみたい、その場に身をおいてみたい、そう思って、今回の旅の計画に合流したのだそうです。

聴けば、夫さんの設計事務所の一角で、カフェをひらいていた時期もあったとか。でも彼女がこれからしたいと思っていることは、場をひらく、ということよりも、人の話を聴く、ということ、聴くことのできる人になりたい、ということ。そしていつかは、人の話を聴くことのできる場がつくれたらいいな、とも考えているようでした。

紅茶にはこれまで、ずいぶん遠くからもいろいろな知らない人が訪ねてきたけど、そんな一人一人が、紅茶から何をおみやげに持ち帰るのだろう、ということに私はいつもとても興味があります。

Kさんの願いは、場をひらくより先に、聴くということ、なのかあ。

紅茶はもともと、一緒に子育てする仲間と出逢いたい、からごく単純にスタートした場だったわけだけど、そのすぐあとから、聴く、ということがずっとならなくて、それはものすごく奥が深いもので、私はいまだに修行中の身です。

けれども、いろいろな人の話を聴く、という一見地味に思える行為から、私はさまざまな人の人生の貴重なおすそわけや、大切な贈りものをたくさん受けとらせてもらっている、といつも感じているので、この日はじめて逢ったつくばのKさんが、

聴くということからはじめたい、とふともらした言葉に、こころが惹かれました。

もしも彼女の希望がそういうことなら、特別なことは何にもしていない、この日のようなふつう紅茶にたまたま来あわせてたこと自体が、彼女の何かしらのおみやげになるのかもしれないね。

ちょうどそこにやってきたのが、連載の第10話にも登場してた、近所のSちゃん。小学1年生の時からかかさず毎週、紅茶にきていた彼女も、今や高校3年生。部活もあって最近、台風で休校になった時か、試験の時以外、めったに紅茶にこれません。

この日の彼女は、進路のことで何だかちょっと話をしたくて紅茶にきたらしい。中学時代は、マッサージする人になるんだ、と言ってた彼女だけど、高2の時の進路希望は、作業療法士、になっていました。

その彼女が、「今は理学療法士になりたいと思ってるんだけどさ、作業療法士の人はけっこうまわりにいるけど、あたしのなりたい方の、そんな話聴かせてくれる人ってあんまりいないんだよねえ」。

彼女がそう言ったとたん、つくばのIちゃんが、「私ね、そういう学校出たんだよ」というので、15年ぶりのIちゃんと、ほぼ1年ぶりに来たSちゃんとの、紅茶でのシンクロシティに、一堂びつくりしたのです。

早速、Sちゃんと、15歳余り年上のIちゃんの、二人の会話が始まる。「でもね、どこを出たからって、何を勉強したかって、それだけで人生は決まらんないもんだからね」というIちゃんの大人なアドバイスに、うんうん、確かにそうだよねえ、と私も幾度もうなずきながら、同時に、いろいろな人の卒業後の十人十色の生き方を思い浮かべて、ちょっぴり笑えたことでした。

聴くということからはじめたい、といったKさん、私をいつかつくばに呼びたい由。こういう願いは持ちつづけてるときとかなうものです。ささやかな願いを、その人が忘れさえなければね。

の女の子が、自分のしんどく、苦しかった時のきもちを真剣に、でも不思議と目をきらきらさせながら語っている場面に、幸運にも遭遇した、というわけです。

特に私から何も言わなくても、お母さんたちが彼女のきもちをまっすぐに聴く時間を、その場で共有してくれたこと、とても有り難かった。聴こうとするきもちのない大人がそこに一人でもいたら、彼女はきっとそれ以上話を続けなかったでしょうから。

紅茶の時間の中にできた、二つの島。6人の子どもたちのいるかたまりと、6人の大人たちのいるかたまりとが、どちらも邪魔しあわず、それぞれ自分たちの島のできごとに集中していました。

おとなのうちわけは、40代の滋賀組3人と、60代の私たち夫婦、そして、おとなへと一歩踏み出した19歳の彼女。世代のちがうもの同士の、話す・聴く、の濃い時間。

Mちゃんの話、親のきもちになって聴く人もいれば、自分が子どもだった時のきもちになって耳を傾ける人もいました。こんな機会って、なかなかない。縦割り紅茶ならではの、人生のシェアリングの時間。

いつか紅茶みたいなことをはじめたいと思っている滋賀のお母さんが、こんな場所あるっていいよねえ、としみじみした口調で言うと、Mちゃんがざらりと、「うん。紅茶ってね、ずーっと深呼吸のできる場所なの、私にとって」。

この日の紅茶は、はじめからしまいまで、めずらしくこの人数の貸し切り状態が続いて、それがなお、神様からはからいようでした。蝉の声、ヒグラシの声、鳥たちのさえずりが、いかにも夏休みらしいこの日のBGMで。

こんなふういきもちを深いところでわかちあえること、ふつう紅茶の、シナリオのない一期一会ドラマの、最もすてきなところだと思います。

22年ぶりの紅茶

今年の7月の終わりの紅茶は、めずらしくこん

でいました。

おなじみの紅茶仲間の何人かにくわえて、はじめに来た人が2人、金沢でピースウォークをはじめ、憲法のことや原発再稼働問題など、さまざまな市民活動をしているピースの仲間たちが5人、隣の富山県からアーティストのライブのチラシを持って来た人が3人、そこへ、みどりのふるさと協力隊で一年間だけ白山麓の村に住んでいる高知出身の女の子がやってくる、といったふうで、話題も、ふるさと協力隊って何？ だったり、憲法だったり、原発だったり、ライブの宣伝だったり、とそれはもうにぎやかしい。

毎週こんなふうだと、とても人の話をゆったりとは聴けなくて、きもちが少々うつむき加減の人には勢いのありすぎる場でしょうが、うまくできたもので、幸い、この日の顔ぶれはエネルギーを外に出せる人たちだったようで。それぞれが興味を持った人のところについて、熱心に情報交換。憲法に関心ある人には、私から、こんな本がおすすめだよ、とか、これ読んでみる？ とか言いながら、その場で即席ミニミニ憲法講座の場面も。

そんなにぎわいのまっただ中にこんにちは～と入って来たカップル。彼女の笑顔に、かすかだけど確かに見覚えあり。「スウさん、私のことわかる？ 覚えてるかな、22年ぶりだよ～」

なんとなんと、まだ津幡に越す前、金沢に住んでいたころの紅茶に、たった一度だけ来たことのあるYさんと、そのパートナーでした！

夏休みで能登の方まで来たから、ちょうど水曜日なんできつと紅茶やってると思って、と。電話の一本もかけずにいきなり出現という、なんと大胆な紅茶の訪ね方。それも愛知県から。もちろんめっちゃうれしかったけど、それ以上に、びっくりくり！ でした。

22年前、Yさんは「生存の行進」という名前のグループに加わって、北海道から沖縄までを歩きとおす、という旅を続けていました。

その旅の過程で、生存の行進の彼らが、金沢に、そして紅茶にも、立ち寄ったのです。そのころの

紅茶はといえば、チェルノブイリ原発事故からまだ数年もたっていない時で、幼子をかかえたお母さんたちと、毎週、原発のことをいっぱい語り合っ
合って、脱原発を願ってのいろんな活動を仲間たちと必死に展開していた、熱い時代の真っ最中でした。

その時すでに歩くメンバーの一人だったYさんのパートナーと彼女は、山口県の祝島に向かう舟の上ではじめて出逢い、一緒に歩く旅の途中で、2人で一緒に生きて行くことを決意したそうです。

22年という歳月。紅茶という場が、それだけの時間がたっても、いまだ原発も憲法も平和のための活動も、自由に語りあえる場所で、本当によかった。Yさんたちの思いがけない登場で、そのことを再認識させられた、この日の紅茶でした。

なんでもない日なんでもない紅茶の、とくべつ

なにげない毎日、当たり前に見える日常だけど、そのなにげないことこそがとくべつなこと。震災のあとのこの国では、とりわけそう思えます。身近な人たちと日々、小さなしあわせや、小さなよかったをよろこびあえたら、それだけでもうとくべつな一日。そんな一瞬一会を生きている私と私たち、なのだと思える前よりいっそう強く感じるようになりました。

紅茶がこれまで歩んできた30年は、前回と今回に登場してくれたような、年齢も性別も仕事も生き方もさまざまな、そういう一人ひとりによって支えられているし、こんな人たちとともにつくる時間の積み重ねによってできている、のだと思います。

そして紅茶は、誰よりも私にとって、そういった小さなうれしいや、よかったをはじめ、たくさん、小さな悲しみや怒りや涙や、世の不条理を感じとるためのアンテナと、ささやかでも行動する勇気を、長い時間かけて育ててくれている場所なのだ、そのことを、この文章を書きながらあらためて今、実感しています。長いこと、同じ一つのことを続けてくるといふことは、きっとこうい

うきもちに気づかせてもらえることでもあるのですね。

2013.11.16

